

原 著

現代青年における生き方への態度と親密な関係性との関連

—大学生の語りから—

加藤陽子*

要 旨

近年、引きこもりや不登校、青少年犯罪の凶悪化など、さまざまな側面において現代青年のあり方が憂慮されている。こうした問題の背景として、自らの存在への空虚感や自己愛の肥大による自己中心主義、現実享受主義的生き方の拡大などといった、現代青年の生き方やあり方への消極的な態度が数多く指摘されている（千石，1991；小此木，2000；影山，1999；岸，2000）。

そこで本稿では、近年の社会構造の変化にともない注目されてきた親密性の変容に着目し、大学生の語りから親密性を介した生き方・あり方への態度を探ることで、消極的であるとの指摘がなされている現代青年の生き方・あり方への態度をより多角的にとらえることを目的とした。その結果、近年の社会学的青年論が状況的・分散的人間関係という親密性の変容による生き方態度の無意味化・希薄化を論じているのに対し、本調査では生き方やあり方への積極的な意味付与に親密な関係性という語りを用いられていた。また、自らの生き方やあり方への態度は、複合的な親密性に裏打ちされており、それらをもとに積極的な態度を構築しうる側面があることが示唆された。

1. 問題の所在

近年、引きこもりや不登校などの教育的問題に加え、薬物依存や家庭内暴力、青少年犯罪の凶悪化が社会的問題になるなど、さまざまな側面において現代青年のあり方が憂慮されている。こうした問題の背景として、現代における青年期の心性はこれまでとは様相が異なってきており、自らの存在への空虚感（影山，1999；岸，2000）や自己愛の肥大による自己中心主義（小此木，2000）、現実享受主義的生き方（千石，1991）などといった、自らの生き方やあり方に消極的な態度の拡大といった指摘が数多くなされている。しかし一方で、ここ数年の青年の生

きがい感に衰退傾向は見られず、ボランティア活動などの社会参加が増加傾向にあるなどの指摘もあり（加藤陽子，2002）、現代青年の生き方・あり方への態度を再度多角的に問うことは大きな意味を持っているといえるだろう。

ところで、青年期の様相のみならず、今日の日本は大量生産・消費システムが国民生活の細部にまで浸透したことにより、脱工業化し、情報化社会へと社会構造そのものが変化した（関沢，2002；山崎，1984）。こうした変化は、人々の関係性にさまざまな変化をもたらしたが、中でも近年特に注目されているのが「親密性」の変容である。そもそも親密性は、社会の脱近代化という流れの中で、その意味内容が大きく変

*早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程

わったとされ、かつてのように伝統的な社会・文化規範に拘束された関係ではなく、関係を結ぶこと自体が目的であり、その関係がお互いに満足感を与え合う限りにおいて維持されるような関係に重点を置く、より対等な関係へと変化しつつあるとされる(A. Giddens, 1992/1995)。

そこで、本稿では近年その変容が注目されている親密性⁽¹⁾に着目し、親密な関係性を取り上げることが、現代青年の生き方やあり方に対する態度を考察する上で、より多角的に問題をとらえることにつながるだろうという考えのもと、大学生の語りを中心に生き方への態度を考察することを目的とする。

2. 現代青年における生き方への態度と親密な関係性

(1) 現代青年⁽²⁾の特徴

現代青年の自らの生き方やあり方への姿勢や親密な関係性は、これまで述べられてきたようなものから質的な変化を遂げたとする議論が多く見られる。特に90年代以降の青年論においては、自己中心性に支配された若者たちが徐々に自己を肥大化させ、あるいは正しい自己イメージを持たずに自己存在への空虚感に苛まれた結果、社会的諸問題を引き起こすという指摘や(小此木, 2000; 影山, 1999; 岸, 1999)、また、若者たちが親密性という殻の中に閉じこもり、狭い範囲でしか生きる意味や自己の存在意義を確認しあえない姿が指摘されている(佐藤, 1993; 宮台, 1994; 川崎, 1999)。千石(2001)は、豊かさを享受することが前提となった今日の日本社会において、生活目標は不明瞭にならざるを得ず、その関心が社会から自らの内面へと向かった結果、規範の外在性を失った自己決定先行型の世の中が生まれたため、現代青年における生き方も規律や規範の喪失へと移行していると分析する。またこうした生き方の変容によって、現代の青年には自らを承認してくれる親密な他者が存在しにくい状況となり、結果としてなかなか自分のあり方や生き方に満足感や

充実感を発見できないとされる。

加えて、芳賀(1999)は、千石と同様に自分の感覚や価値観を基準に生き方を自由に選択できる今日の日本社会において、青年たちは自分らしさを求めながらも追及することが極めて困難なパラドキシカルな状況にあると指摘する。そのため、現代青年は他者との親密なコミュニケーションを「自分らしさを確認する情緒的で求心的な友情・愛情的人間関係」からより「匿名的で状況的な分散的人間関係」とヘシフトさせることでこの困難な状況に対処しているとされる。すなわち、芳賀の指摘によれば、現代青年はお互いの「らしさ」を確認しあうような「生き方に直接触れる部分に介入しながら」ず(芳賀, 1999, p26)、むしろ「自分らしさのパラドクス」(p24)を生き残る手段として、状況に応じて「自分」の表出を分散し、コントロールするという特徴を有するといえるだろう。また、浅野(1999)は、こうした人間関係の変化から、現代青年は親密な関係性を「インスツルメンタル(何かの目標のための手段)」から「コンサマトリー(その時をエンジョイしようとする)」へと移行させており、親密性の選択自体を楽しみつつあると指摘する。そして、こうしたインスツルメンタルな親密性の消滅にもなつて、青年たちの生き方やあり方への積極的な意味希求はほとんど消失していこうと示唆している。

このように近年の社会学的青年論では、脱近代化にもなつて変容した、情緒的で再帰的な性格を持つとされる親密な関係性は、現代青年においてはコンサマトリーで状況的・分散的関係へとさらに変容しつつあり、そうした変化にもなつて自らのあり方や生き方への意味希求はますます希薄化する傾向にあると論じられているといえよう。

(2) 青年期の生き方への態度と親密な関係性

一方、従来、発達の見地からは青年期の生き方・あり方への態度と他者との親密な関係はそ

れぞれ大きな役割を果たすことが説明されてきた。周知の通り、青年期は身体的な成熟ともなつて、自らへの関心が高まるとともに他者への関心も強まり、心理的・社会的にも大きく変化していく時期とされる。特に自らのあり方や生き方を問う積極的態度は青年期に重要な役割を果たす。たとえば青年期において、自らの人生を切り開く意志が強いものは自己受容度³⁾が高く、精神的にも健康であることが明らかにされている(高井, 2000)。また、実存的不安と自己受容との関連において、自らのあり方や生き方に関する関心の高さが自己承認のためのさまざまな気づきをもたらすことが指摘されているほか(服部・吉田・小熊, 1990)、青年期の問題理解には、自らの生き方やあり方への肯定感や充実感、使命感をもたらすことが重要であるという指摘なども見られる(葛西, 2000; 長野, 1991)。

同様に、青年期においては人間関係を再構築することも重要な課題とされており、特にこの時期の仲間との関わり合いは子どもの依存性から成人の自律性へと移行するために重要な要素であるとされる(Erikson, 1968)。青年期における人間関係の特徴は、児童期が物品や活動などの関わり合いを中心とするのに対し、親密性や尊厳、共鳴といったものに基づく情緒的充足を中心とした関わり合いへと変化していく点にみられる(Atwater, 1992)。このように青年期は、お互いの差異を受容しつつ、相手との信頼感や相手への自己開示、忠誠を中心とした親密で有意義な人間関係が形成されるといえるだろう。そのため、この時期の親密な他者は、自分を支えてくれ、自尊心を高揚させたり孤独感を癒してくれたりする精神的安定をもたらす存在であり(落合ら, 1993)、自分の盲点に気づかせ自分という存在の理解を深めてくれる鏡像的存在であるといえる(遠藤, 1997)。さらに、高井(2003)は、他世代と比べ青年期においては自らの人生に対する目的や希望を求める割合が多く、中でも自らの理想とする生き方や他者

との情緒的関係を希求する回答が多いと指摘している。こうしたことから青年期における生き方あり方への積極的な姿勢と他者との親密な関係性とは極めて密接な関連が示唆されているといえる。

そもそも親密性は、社会の脱近代化という流れの中でその意味内容が大きく変わったとされる(Giddens, 1992/1995)。すなわち、かつてのように伝統的な社会・文化規範に拘束された関係ではなく、関係を結ぶこと自体が目的であり、その関係がお互いに満足感を与え合う限りにおいて維持されるような関係に重点を置く、より対等な関係へと関係性が変化しつつあるといえる。こうした自己投入と相手への信頼によって成り立つ親密性、すなわち「純粋な関係性」(p.12)は、近現代社会における存在論的な安心を得るためにも非常に重要な要素とされる(Giddens, 1990/1993)。発達の見地から重要とされてきた青年期における他者との親密な関係もまた、社会的・経済的な生活という外的な条件ではなく、相手との信頼感や相手への自己開示・忠誠を中心とした情緒的満足を提供する人間関係であり、こうした情緒的で自己再帰的な、いわば「純粋な関係性」は青年期における生き方やあり方への態度と密接な関係にあるといえるだろう。

このように、現代青年における生き方やあり方を問う上では他者との親密な関係性は重要な要素であるにもかかわらず、むしろ近年の社会学的青年研究においては、それらが希薄化・分散化しているという議論が先行し、自らの生き方やあり方との関連において有意義であるべき親密な関係性が「疎外」されているといえる。そのため、本研究では青年期における親密な関係性を取り上げ、大学生の語りから親密な関係性が自らの生き方・あり方への姿勢を語る上で親密性がどのような関連性を持って語られるのかということに注目し、考察することを目的とする。

3. 本稿の目的と意義

(1) 本稿の位置づけ

ところで、既述の社会学的青年論による青年期における親密性の疎外という指摘からは、そもそも現代青年が自らのあり方や生き方に関して積極的な態度を持っているのかという問題を提示することもできるだろう。既述の通り、現代青年の生き方やあり方へ関心の希薄化については、浅野のみならずしばしば議論がもたれているところでもある(千石, 1991; 小此木, 2000; 影山, 1999; 岸, 2000)。

しかし、大学生と高校生を対象とした人生の意味・目的への態度を調べる調査(加藤陽子, 2002)⁴⁾によると、個人がどの程度人生に生きる意味や目的を見出しているかといった態度を探るPIL尺度(Part-A)得点は、高校生の平均得点が81.67点(SD=7.63)、大学生の平均得点が91.17点(SD=14.3)と、中程度の意味・目的を持つ態度が示された。この結果から、大学生と高校生が中程度の実存的な生き方態度を保持しており、他世代と比較しても決して低くない数値が示されたといえる。加えて轟(1998)は、様々な調査結果を検討しながら、青年の行動には以前に比べ規範逸脱的なものも見られるが、意識の上では必ずしもそうでないことを示している。轟によると、若者のこうした行動の変化は、むしろ価値観の多様化した時代に対しての「判断保留」であり、若者側の当然の「適応的な心理変化」であるとされる。また、日本労働研機構が実施した調査(小杉, 1990)においては、近年の若者に特徴的な行動は変化する社会への適応形式であり、価値観や態度の変化までは断言できないとして、轟の主張を裏付ける結果を呈示している。

以上のような指摘からは、現代青年における自らの生き方やあり方への態度が決して消極的なものばかりではないことがうかがえ、現代青年の生き方への態度に関しては、より多角的な検討を試みる必要があるといえるだろう。しか

し、従来の調査においては量的な取り組みが多く(浅野, 1999; 2002)、詳細で多角的な分析はあまり行われていない。そこで本稿においては、生き方・あり方への態度について多角的な分析を行うための足がかりとして、そうした態度についてのディテールを深めたいと考え、被験者の重点を置いている個所が明確化されるなど多様なデータが得られるとされるインタビュー法を用いた調査を行うこととした(桜井, 2002)。

(2) 分析

本稿では、大学生を対象としたインタビュー調査⁵⁾を用い、彼らの語りにおいて自らの生き方やあり方がどのような態度で語られ、親密性とどのように結びつけられているのかを探ることとした。調査は、あらかじめ質問形式を決めておきつつも、話の流れで被調査者が自由に語るができる半構造化面接法を用い、それぞれに自らの生き方やあり方についてどのように考え、どのように対処するかについてたずねた。なお、本稿の目的は、青年期の渦中にある者が自らの生き方やあり方をどのような態度で語り、またそこに親密な関係性がどのように結びつき、位置づけられているのかということに注目して分析を行うことである。そのため、インタビュアーと回答者による合意・否定がどのように形成されるかといった相互作用効果による語りの構築過程ではなく、語りの意味内容により注目した分析を行った⁶⁾。また、本研究において調査協力が得られた大学生7名は、PIL尺度得点を基準に選出され、人生に生きる意味や目的を見出しているかといった態度を平均的に持ち合わせているものである。これは、先述した青年期の生き方やあり方への態度への指摘の揺らぎを考えたとき、できる限り中立な立場で調査を行おうとしたためである。7名というケース数は決して十分な数とはいえないが、生き方やあり方への態度と親密性との関連を通じて、生き方・あり方への態度のディテールを探るとい

本稿の目的を達成するうえでは、不足のないデータであると考えている。

ところで、そもそも青年期という時期は、近代産業社会の要請による学校教育期間の長期化とそれを可能にした個人の富の増大という2要因によって生み出されたとされる(加藤潤, 2002)。戦後日本社会においても2つの要因はさらに拡張され、高等教育は一般化し、大衆化していった。特に大学の大衆化は戦後めざましく、『学校基本調査』によれば、1945年から1955年には8%前後だった大学等への進学率は、2002年には44.8%に達している。そのため、今日の大学生は現代の青年期延長やモラトリアムの大衆化の代表的存在といえる(加藤, 2003)。加えて、彼らは自らのあり方を模索し続けることに重点がおかれるところに、その心性の特徴があるとされる(溝上, 2002)。白井(2003)は、対象の価値ではなく「私らしさ」を越えた「主体性の確保が彼らの関心事である」(p.90)と指摘する。このように今日の大学生は、大学生であるがゆえの社会的文脈を背景として、社会に適応しながらも自らの生き方やあり方を主体的に確保する方法を模索しているといえ、現代青年における生き方・あり方への態度を探るといって本稿の目的を達成するにたるデータを提供できるものと考えられる。

4. 他者という親密な関係性と内面の自分へのコミットメント

(1) 他者との親密な関係性と生き方への問いの関係

既述の通り、近年の社会学的青年論においては、包括的で情緒的な関係から匿名的で状況的な関係へと親密な関係性が移行しており、そのため生き方への態度の意味希求が希薄化・消極化しているという議論がなされている(芳賀, 1999; 浅野, 1999)。本稿は社会学的青年論を完全に否定するものではないが、量的な調査による親密な他者の分散化という分析を前提としたに議論によって生き方やあり方への態度が希

薄化しているという指摘からは、現代青年の生き方への態度の詳細は語りえないと考え、まず生き方・あり方への態度において親密な他者がどのように関連付けられているかということを探ることとした。そこで、自らのあり方・生き方に関して疑問や不安を感じたことがあるか、またそのような思いを抱えたときにはどのように対処するか、誰かに話すか、という内容について理由を含めて語ってもらったところ、次のような回答が得られた⁷⁾。なお、回答は「話す」という者と「話さない」という者の双方にはつきりと別れた。

A: 話しますね。結構、何か前には母親に特に言っていたんですけど、…(中略)…あと本を読んだりとか親に聞いてみたりとか、あとは日記つけてみたりとか、とりあえず何でそんなふうにするのかなというのを探るためにいろいろな手を使うんじゃないかな。

B: 何がつまらないと感じるかというのはわからないんですけど、もしそういう気持ちになったら、多分、ほかにおもしろいことを探すんじゃないですかね。…(中略)…例えば、そういうことを考えたときに、話すならやっぱり、つき合っている人がいるんですけど、その人とか、あと大学で一番仲いい人、親友だと思んですけど、その人に話したりとか、話すすと落ちつくんですけどね。…(中略)…そういうのはあるかもしれない。彼らには特にアドバイスを求めているわけではなく、こういうふうな気持ちもあるんだよみたいな(笑)。

C: 自分の生き方とか、将来の話であるとかちょっと不安だなと思ったりしたときに、人と話すすと、ちょっと前向きに考えられるようにはなる。考えるばかりで、あんまり具体的に何をしようと、1人だと多分あんまり出てこなくて、人に話して、何かその話になったりしたら、アドバイスというか、こういうのとかもあるよ

ねというのを聞いて、じゃまずはこれをしようかなという、何か具体的に考えられるようになる気はしますね。

近年の青年に関する議論においては、自己存在にかかわる人間関係は包括的なものから匿名的・分散的なものへと関係自体が変化しているとされるが、他者への開示を表明した大学生の語りにおいては、両親や親友、恋人などのごく身近で特定の親密な関係、すなわち情緒的で求心的な友情・愛情関係を保っているであろう他者が開示対象として想起されている。加えて、こうしたきわめて親密な他者に悩みを開示するという行為は、当事者である大学生によって、不安を軽減するための手段として積極性を持って語られていた。たとえば、大学生Bによる「話すと落ちつくんですよ、彼らには特にアドバイスを求めているわけではなく、こういうふうな気持ちもあるんだよみたいな」という回答や大学生Cの「人と話すと、ちょっと前向きに考えられるようにはなる」といった回答からは、返答の有無はさておき、親密で情緒的かつ求心的な友情・愛情関係にある他者に、「話すという働きかけ」を起こすこと自体が自らの生き方・あり方への承認を受けたという心理的安定につながると位置づけられているといえ、親密な関係にある他者の存在そのものが、生き方・あり方における態度への積極性の付与に貢献している語りが成立しているといえる。以上のことから、青年論で疎外されている情緒的で求心的な友情・愛情関係という親密な関係性が、当事者においてはむしろ積極的に自らの承認につながっており、そうした関係性が「ある」という状況こそが心理的安定につながるといえる。大学生が持ち合わせているということがうかがえるだろう。

一方、大学生の中には、しばしば自らの生き方やあり方について親密な関係にある他者に開示するなどの行動を起こさないという語りもみられた。しかし、ここでの興味深い点は、彼ら

が親密な他者の存在を想定した語りをしていることである。

D：そういうことを思っすぎて悩んだりしたときは、両親と一緒に住んでなかったんですね、だれにも言わなかったし、話したいとも思わなかったですね。…(中略)…心の支えは家族なんです。自分で全然寂しいとか感じてなかったんですよ。そのときは全然、そういうふうに自覚してなかったんですけど、それが結構、どんどんきつい状態になっていつちゃって、親を見ていだけで、随分自分は変わるんですよ。親と一緒に住んでいると、自分というのは、こういう環境にいるんだ、こういう人間なんだと、離れると、随分それがあいまいになってくる。親の影響は大きいですね。

E：僕の場合、自分は何のために生きているんだろうとか居心地が悪いとか、中3のときにいろいろ思っ、でもどうして乗り越えたんだろうという、やっぱりただ何もしなかったな、時間が解決したと言うと何かあれなんですけど、結構そういうのもすべて過程だと思ってるんです。…(中略)…話す頻度はもしかしたら多いかもしれないんですけど、友達とか、僕の場合、なんか相談じゃないんですね、ため込んだものを誰かに言っった時に、絶対相手に重たいわけじゃないですか、そうすると悪循環にはまるんで、ネタになったりとかして盛り上がっちゃったりして、大体脱線して、生活の知恵みたいな感じ(笑)。

F：ふだん自分が何かのためにとか、だれかのために生きているのかなとか、自分の居場所はどこだろうみたいなことは考えたことはありませんね。でも、とりあえず自分の生き方とか、今の状態には満足してます。ある程度、自分のことは認めてやらないとおもしろくないじゃないですか。おもしろくないというか、何というか、…(中略)…だからって、だれかにそのことを

話したりしたことはないですね。でも、将来のこととかだったら話はすると思います。家族とか、かなり親しい友達とか、やっぱり話せば楽になる部分があると思うし、共感してくれたりすれば、楽になる。

G：ふだん、何のために生きてるんだろうとか、自分の居場所はどこだろうみたいなことを考えたことは、高校時代は頻繁に考えてたんです。でも、いつも行き着く場所が一緒だったんで、とりあえず何周もしたらもうやめるようにしているんです。…(中略)…人に相談しても価値観が違うから。もちろん、友達とかにそういう話を話したいという欲求にも駆られますよ。自分の考えとかを話したいんですけど…。

以上のように、彼らの語りには両親や親友、恋人などのごく身近で特定の親密な関係、すなわち情緒的で求心的な友情・愛情関係を保っているであろう他者が出現している。特に、大学生EやGは友人などの親密な関係にあるであろう他者を想定しながらもあえてそれを「話さない」と述べている。その理由としては、「重くなるから」あるいは「価値観がちがうから」といったロジックが用いられている。現代青年を語る上での1つの基軸として「やさしさ」という要素がある。「やさしさ」は、自らの承認者となりうる他者を喪失する危険性に対する自己防衛機能とされるが(栗原, 1981)、EやGの語りにはこうした「やさしさ」基軸にのつとつた、相手の気持ちを推し量った結果としての「やさしい」回避ロジックが見られたといえるだろう。親密な関係性を希求しながらもあえて「話さない」こうした語りからは、現代青年の特徴とされる心理的距離を保った人間関係すなわち<状況的な分散的な人間関係>の存在がうかがえる。しかしながら、一方で、彼らの語りからは親密な関係性への希求が読み取ることができ、そうした関係性を重要視するがゆえのアンビバレントなやさしさという語りは、他者との親密な関係

性が自らの生き方やあり方への態度に密接に関連していることを逆説的に説明しているといえよう。

(2) 内面の自分へのコミットメントという新たな手段

ところで、芳賀(1999)は、現代青年の中にこうした逆説的でアンビバレントな親密性が存在する理由を、「内面の自分」(芳賀, 1999, p.26)という観念が徐々に消滅に向かい、自分らしさを確認する情緒的な関係が急進的な友情・愛情関係からより分散的な人間関係へとシフトする「移行期」にあるためであると述べている。また、浅野(1999;2002)は、こうした人間関係への移行は、参入・離脱の自由が保障された選択的なコミットメントへの移行であるとし、移行にともない自らのあり方や生き方への積極的な意味希求はほとんど喪失し、選択の享受それ自体が目的となると説明している。こうした指摘を勘案すると、生き方やあり方への問いの開示を「やさしさ」というロジックで回避する青年たちは、状況的で分散的な人間関係に生き、生き方やあり方への意味希求というよりは、むしろ親密な関係性の選択自体を目的としていると解釈できる。

しかし、既述の通り、加藤陽子(2002)や轟(1998)の調査においては現代青年の生き方やあり方が消極的態度へと移行していることまでは言及できていないことから、果たして当事者の語りにおいてこうした解釈が得られるのかを探るため、先の質問で「やさしさ」ゆえに開示行動を取らないと述べた者に、今の自分の生き方やあり方に満足しているか、またしているならその理由は何かということをつづねた。その結果、開示行動を起こさないとした大学生における語りにおいては、内面の自分の消滅や意味希求の喪失傾向は見られず、むしろ「内面の自分」へのコミットメントがうかがわれた。

E：高校は、野球やってたんですけど、高2の

ときにけがをして、もうプレーできなくなって、才能も努力も自分より下の人に勝ってるのに、何で結果が出ないんだらうと。そうすると、頑張ることがあほらしくなったりとかするんですけど。でも結局、すごい悩む時期があっても、たまたま運よく評価された。…(中略)…今の自分には満足してますね…(中略)…今の心の支えは自分自身じゃないかと思いますね。特に、自分の過去とか自分自身、これまでやってきたことですね。自負があるから大丈夫だろうということです。

G：昔のような、自分の感情は抑えない考え方でいられたほうがよかったのかなとも思うけど、自分の生き方とか今の状態は満足できる。こういう考え方になってよかったことも悪かったこともあるんですけど、いろんなことを本当に自分自身で見つめられるようになってきたかなというところがあるんですよ。…いろいろ環境には納得しちゃいますね。あっちじゃなくてこっちの環境にいたからできたことっていうのもまた自分にとって大きいから。そういった意味でも、心の支えは自分かな。自分自身に陶醉しちゃうんじゃなくて、自分自身をいつも客観的に見ていることとか、物事をいつでも客観視しようとしている自分かもしれない。

以上ように、「やさしさ」による回避というロジックを用いた者たちは、総じて「これまで」の時間軸に基づく自身への自負に安心感や自己承認を求めるといった語りを用いていた⁸⁾。

たとえば、大学生Eは、かつて実存的不安をもったことがあるが今の自身の生き方やあり方には満足していると述べ、心の支えを「特に自分の過去とか自分自身、これまでやってきたことですね」と位置づけることで心理的安定を求めようとする試みがみられる。この語りからは、これまでの様々な経験を自己再帰的に評価し、「内面の自分」の問題として還元している姿が見て取れ、それを結果的に心の支えと位置づける

ことに成功した結果、現在の自分の生き方やあり方を積極的に受容している姿が見うけられる。さらに、大学生Gの語りにおいては、今の生き方や状況を満足できることに対して、これまでの様々な状況の中から自分が今の環境を選び取ったという「結果」を積極的に意味付ける語りを行っている。すなわち、選ばれなかった環境の中にいる自分の可能性と今の自分を対比することによって、今の自分自身の可能性を相対的に高く評価した結果、自らの生き方やあり方を受容しているといえる。こうした語りは、一見受動的に見うけられるが、環境の選択の享受というよりは、むしろより積極的に自らの可能性に意味を付与することで生き方・あり方への受容に成功しているといえるだろう。

以上のことから、自分のあり方や生き方への問いを誰にも話さないとした者の語りからは、意味付与の際に必要な要素として、これまでの自分の経験や環境の選択へといったことへの自己再帰的な評価に基づく、いわば「内面の自分」へのコミットメントが語られていたということができよう。芳賀や浅野の指摘は、インストルメンタルな親密性の消滅にともなう自らのあり方や生き方への積極的な意味希求の喪失への移行を示していたが、本稿においてはむしろ他者との親密な関係にゆだねていた自らの生き方やあり方への承認を、同時に「自らの内側」に求めることで補強し、積極的な意味付与を行う姿が見て取れたといえよう。

5. まとめと今後の課題

本稿の目的は、現代青年が自らの生き方やあり方に対してどのような態度で語るのか、またそこに親密性との関連はどのように位置づけられているのかを探ることで、より詳細で多角的な生き方・あり方への態度の分析を行うことであった。その結果、大学生の語りから<他者との親密な関係性>と<自らの内面へのコミットメント>という複合的な親密性に裏打ちされ、生き方やあり方への態度が積極的に構築されう

るといふ示唆が得られた。このように当事者である大学生が、生き方やあり方への積極的な意味付与に情緒的で求心的な友情・愛情的な人間関係という語りを持ち合わせていたことは、興味深い。青年期の渦中にいる者たちが、自らの生き方やあり方への意味付与という文脈に親密な関係性を想定した語りを用いたことは、現代青年における生き方・あり方への態度に新たな示唆を投げかけたといえるだろう。

そもそも、ありのままの自分を受け入れてもらえるという感覚は、自分の存在の意味や自分の人生への信頼につながるとされているが (Rogers, C.R., 1951)、今回のインタビュー調査においては、自らの生き方やあり方への積極的な態度を他者との親密な関係性にゆだねており、生き方・あり方への問いやそれらと親密な関係性へと結びつきは失われていないといえるだろう。今日の情報化社会が人間関係や価値観の変容をもたらしたのは周知の事実である。しかし、そうした変容にもかかわらず、現代青年の生き方やあり方における親密性の有効性が失われていないという示唆が得られたことは、非常に興味深い。

ところで、人は挫折経験などの何らかのコンフリクトを抱えたときに、特に自らの生き方やあり方への疑問や態度が喚起されるという (Frankle, 1969) ⁹⁾。清水 (2002) は、様々な事例を引用しながら、現代青年が挫折などの自分を見失う経験をきっかけに、それまで持っていた価値観や自信を喪失し自分の生きる意味を再構築する過程を縦断的にとらえた結果、挫折経験が自分はどうのような人間であるのかといった問いを持つ契機 (=「転機」(清水, 2002)) となり、自らのあり方や生き方への積極的な意味付与への転換点になると、その重要性を指摘している。また、大倉 (2002) は、自分の存在が足元から崩れ去りそうな出来事を経験する過程で、世界に企投され「居場所」¹⁰⁾の混乱が生じた結果、個々人の生き方が問われると指摘し、その後の「居場所」の獲得によって意味が生ま

れることを示唆している。一般的に「居場所」とは、「様々な場面で自己の存在を感じ、自分と他者との相互承認という関係の中で、人生や世界におけるポジションを見通せ」(萩原, 2001)る場所を指し、自らの生き方やあり方への態度に重要な要素とされる (萩原, 2001; 増井, 2002)。青年期におけるこうした内面の葛藤を自らの手で「survive=生き残る」¹¹⁾という経験をするのもまた、我々に連続性を与え、またそのことが今後の人生において“自分の人生は大丈夫だ”と信じられる基盤となるだろう。今後は、このような点に考慮した更なる考察が必要といえる。

引用文献

- Atwater, E., 1992, *Adolescence (3rd ed.)*, Prentice Hall. : New Jersey.
- 浅野智彦, 1999, 「親密性の新しい形へ」 富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』星社厚生閣.
- 浅野智彦, 2002, 「都市青年の意識と行動」『日本社会学会発表論文集』日本社会学会.
- Erikson, E.H., 1968, *Identity : Youth and crisis*, New York : W. W. Norton.
- 遠藤公久, 1997, 「交友関係」加藤隆勝・高木秀明編『青年心理学概論』誠信書房.
- Frankle, V.E., 1969, *The will to meaning : Foundations and applications of logotherapy*, New American Library.
- Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity*. : Stanford University Press, (=1993, 松雄精文・小幡正敏訳, 『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結—』而立書房.)
- Giddens, A., 1992, *The transformation of intimacy : sexuality, love, and eroticism in modern societies*, Stanford, Calif. : Stanford University Press, (=1995, 松尾精文・松川昭子訳, 『親密性の変容—近代社会におけるセクシャリティ、愛情、エロティシ

- ズム一』而立書房)。
- 萩原健次郎, 2001, 「子供・若者の居場所の条件」田中治彦編著『子ども・若者の居場所の構想「教育」から「関わり」の場へ』学陽書房。
- 服部智・吉田昭久・小熊均, 1990, 「「自己受容」の基底因一実存不安との関連の分析的検討一」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』39, 199-216。
- 平川和子, 1992, 「「成人期」の発見と女性一親密性をめぐる男/女一」『精神療法』18(6), 522-528。
- 芳賀学, 1999, 「自分らしさのパラドクス」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣。
- 伊藤美奈子, 1989, 「青年生地が形成における自己受容の研究の意義と視点」『青年心理学研究』3, 20-28。
- 影山任佐, 1999, 「『空虚な自己』の時代」日本放送出版協会。
- 加藤潤, 2002, 「近代言説としての青年」『名古屋女子大学紀要』48, 23-26。
- 加藤陽子, 2002, 「青年期における実存不安に関する一研究」, 早稲田大学大学院人間科学研究科修士論文。
- 加藤陽子, 2003, 「大学生の現代性に関する実存的考察一戦後若者論の系譜を踏まえて一」『人間・エイジング・社会』6, 28-35。
- 葛西康子, 2000, 「生きる意味」を求めて自傷行為を繰り返したケースの事例研究」『心理臨床学研究』18, 25-37。
- 岸良範, 2000, 「ゆらぐ者同士の出会う場所としての家庭・学校」『PSIKO』1, 47-49。
- 栗原彬, 1981, 『やさしさのゆくえ=現代青年論』筑摩書房。
- 小杉礼子, 1990, 「職業キャリアと労働をめぐる若者の価値観」『高卒者の進路選択と職業志向 初期職業経歴に関する追跡調査より』日本労働研究機構。
- 川崎賢一, 1999, 「地球社会の文脈から見た日本
- 本の青年」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣。
- 宮台真司, 1994, 『制服少女たちの選択』講談社。
- 溝上真一, 2002『大学生論一戦後大学生の系譜を踏まえて一』ナカニシヤ出版。
- 増井武士, 2002, 『不登校児から見た世界一ともに歩む人々のために』有斐閣選書。
- 文部科学省, 2001-2002, 『学校基本調査』財務省印刷局。
- 文部省, 1925-2000, 『学校基本調査』大蔵省印刷局。
- 長野博, 1991, 「心を理解するための理論」『ケース 青年心理学』有斐閣ブックス。
- 岡堂哲雄, 1993, 「PIL Part-A」PIL研究会編『生きがい』河出書房新社。
- 小此木啓吾, 2000, 「現代における自己のあり方一二つの自己概念一」『PSIKO』1, 31-33。
- 大倉得史, 2002, 『拡散diffusion一アイデンティティをめぐる僕たちは今一』ミネルヴァ書房。
- 尾崎仁美・上野淳子, 2001, 「過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響一成功・失敗経験の多様な意味一」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』27, 63-87。
- 落合良行・伊藤裕子・斉藤誠一, 1993, 『青年の心理学』有斐閣。
- Rogers, C.R., 1951, Client-Centered therapy: Its current practice, implications and theory, Boston: Houghton Mifflin.
- 佐藤俊樹, 1993, 『近代・組織・資本主義一日本と西欧における近代の地平』ミネルヴァ書房。
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学一ライフストーリーの聞き方』せりか書房。
- 関沢英彦, 2002, 「ケータイ時代の消費者増と新しいマーケティングの姿」関沢英彦・鷲田祐一・ミカエル・ピョルン『シチュエーションマーケティング』かんき出版。
- 清水弘司, 2002, 『何が子どもの転機になるか

自分なりの人生を生きる子どもたち』新曜社。
 千石 保, 1991, 『「まじめ」の崩壊 平成日本の若者たち』サイマル出版。
 千石保, 2001, 『新エゴイズムの若者たち』PHP出版。
 白井利明, 2003, 『大人へのなりかた—青年心理学の視点から—』新日本出版社。
 高井範子, 2000, 「自己受容と生き方態度に関する検討」『自己心理学研究』1, 57-71。
 高井範子, 2003, 「生きがい等」に関する研究 II 青年期・成人期を中心として」『教育心理学学会発表論文集』日本教育心理学会。
 轟亮, 1998, 「『まじめ』は崩壊したか? ~2時点観の比較分析を中心に~」『大阪経済大学研究成果報告書 現代高校生の進路と生活~その構造と変容~』。
 Winnicot, D.W., 1972, *Holding and Interpretation*. Mark Paterson Associates, London (=1988, 北山修監訳『抱えることの解釈』岩崎学術出版社)
 山崎正和, 1984, 『やわらかい個人主義の誕生—消費社会の美学』中公文庫。

註

- (1) Giddens, A.の議論は、近代における恋愛感情の変容を歴史の変遷と現代における特質を分析しており、セクシュアリティの成立と親密性の変容を主に取り上げている。しかし、本稿においては、親密性におけるセクシャリティ的要素を切り離すことは可能と考え(平川, 1993)、むしろその「再帰的自己自覚資源(Giddens, 1992)」としての性質に重きを置き、対等な人間同士による人格的きずなの交流としての親密な関係性を取り上げる。
- (2) 本稿で用いられる「青年」という言葉には、通常そこに含まれる教育的配慮や理想的な成人への成長過程にある存在としての「青年」という意味を含まない。しかし同時に、「若者」という言葉を使用する際に喚起される消費やサブカルチャーの主体という意味も同時に含

まないことを改めて記しておきたい。

- (3) 従来、自己受容は人生を生きていくうえで個人の自己実現のために必要な一要因として述べられてきた(伊藤, 1989)。
- (4) 調査概要調査対象者は、首都圏に在学中の大学生及び高校生男女であり、有効回答総数は420名である。内訳は大学生242名(M111、F131)平均年齢20.9歳、高校生178名(M101、F77)平均年齢17.1歳であった。調査時期は2001年8月~11月。調査尺度はPIL心理検査(Purpose-in-Life test)の態度スケール:岡堂(1993)による改訂版を用いた。20項目、7件法尺度、得点化は1点から7点までである。
- (5) 調査対象者は7名で、都内私立4年制大学在籍1年~4年の男性4名、女性3名である。調査は2001年9~10月に行われ、インタビュー時間は1人平均30分~1時間である。
- (6) 引用中における括弧内・下線部分は筆者の補足である。
- (7) 自分のあり方・生き方に関して疑問や不安を感じたことがあるとする者は7名中6名であった。なお、今回のインタビュー法は半構造化面接法を用いたため、「自らのあり方・生き方に関して疑問や不安を感じたことがあるか」「そのような思いを抱えたときには誰かに話すか」「その他の対処法は何か」などのインタビューガイドはあるものの、質問自体は完全には固定されていない。
- (8) もちろん親密な他者に生き方への問いを開示し、そこに安心感や承認感を得るとした者たちの中にも、過去の経験に安心感や承認感を求めているものがいた。なお、ここで再度、自らの生き方・あり方に関して他者に開示しないと述べた者たちが親密性を疎外してはいることを注記しておく。
- (9) なお、こうした過去の挫折体験への認識に関しては、認知や社会的能力といった個人的要因が深く関係しているという指摘もある(尾崎・上野, 2001)。

(10) 大倉 (2002) は、こうした「<主体>が世界や時間の中に「住み着く」ために必要な「自分=居場所」を「居住自己」(p.58)と呼んでいる。

(11) “survive”とは、いくら攻撃しても周りを取り巻く環境がそう簡単には壊れないという実感のことを指す。Winnicott, D.W. (1972)の述べたこの考えは、幼少期を対象に語られたものであるが、青年期においても非常に大事な考えであると思われる。また、“survive=生き残る”ということは、何も他人を蹴落としてその状況を生き延びたり乗り越えたりすることではない。どのような環境であろうともそれを受けとめ、信頼することを指すものである。

[2004年5月26日受理]

Today's Youth : The Relationship between their Attitude toward Life and
their Intimate Relations
–From Narratives of University Student's Attitudes toward Life–

Akiko Kato*

Abstract

In recent years, the ideals of today's youth's can be considered worrisome from various angles because of increases in withdrawal from and truancy from school, the rise in brutal crimes committed by youth, etc. Some point to passiveness regarding the way of life of today's youth as one source of such problems. There is, for instance, an increasingly acute feeling of despair prevalent in today's society that stems from extreme self-centeredness.

The purpose of this study was to consider the relationships between attitude toward life and intimacy utilizing narratives of university students. This approach was taken because it had been thought that the attitude toward life of today's youth could be assessed from various angles by observing changes in intimacy that has accompanied changes in community structure of recent years. Sociological research on young people in recent years shows that intimate relations lend a positive note to attitudes toward life, while decentralized interpersonal relationships trended to render life meaningless for the subjects. The above-mentioned results suggest that attitudes toward life are supported by intimacy, and that lifestyle attitudes can be positively influenced by the presence of intimacy.

*Graduate School of Human Sciences, Waseda University